

藩の収入は、治めている土地から入る年貢米ねんぐまいが中心でしたが、たびたび大雨や冷害にみまわれ、夏のひでりなどもあって作物のとれ高が落ち込み、財政が苦しくなりました。

江戸時代の中ごろにも大きなききんがありました。10代藩主、秋田肥季ともすえの時代にあった「天保の大ききんてんぽう」(1833年)は特にひどく、三春藩の財政を困難にし、藩の政治をゆるがすものとなりました。

武士は藩主から手当てをもらって生活していましたが、身分の低い武士のくらしはとても苦しかったとされています。

## イ 農民のくらし

農民は年貢ねんぐとして、田や畑などに対する税と、特産物などに対するいろいろな税を納めさせられました。

一番多かったのは田や畑などに対する税ですが、これを本年貢といって半分は米、半分はお金ではらうしくみになっていました。

このほかに夫役ぶやくといって、いろいろな人足にんそくに出させられました。

江戸時代の中ごろからたびたびききんに見まわれ、農民のくらしはますます苦しくなり、餓死がしした人もたくさんでました。

飢えうに苦しんだ人々の騒動そうどうもあったとされています。

江戸時代の主な作物は、米のほかに、あわやひえ、大豆あずきなどの雑穀ざっこくでした。

三代藩主、秋田輝季てるすえは、幕府への献馬や藩主乗用馬など良い馬の産出に力を入れました。

農家の収入を上げるとともに藩の収入を上げるため、藩の費用で良い馬を買い入れて品種の改良をはかりました。

馬をかう農家がふえ、だいたいの農家では2～3頭、7～8頭もかう農家があり、ひとつ屋根の下の馬屋で大切に育てました。